

平成29年度

第1回学校力向上に関する総合実践事業アドバイザー派遣事業

□期 日 平成29年 6月20日(火)
 □会 場 名寄市立名寄小学校 5年1組教室、音楽室
 □講 師 学校力向上に関する総合実践事業アドバイザー
 上越教育大学教職大学院教授 赤坂 真二 氏

- テーマ
 - ・チーム学習による授業改善の在り方
 - ・学級経営と連動したよりよい授業構築の在り方

●研究の視点

◆チーム学習の充実の視点

- ・学習目標に即したアウトプット型の学習課題の設定
- ・子どもたちがかかわり合い、確かな学びのある学習活動の充実
- ・学習課題の達成を確かめる個人学習の場の設定
- ・全員に学習課題の達成を実現するフォローアップの手立ての工夫

●公開学級 5年1組 4校時 国語「言葉と事実」(森江 裕紀 教諭)

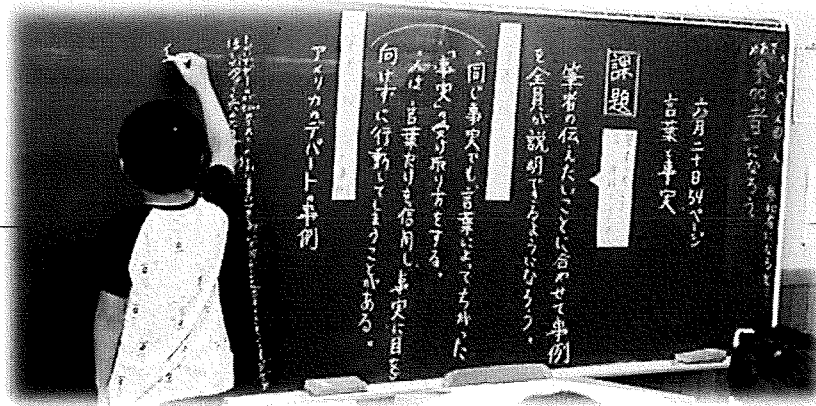
◆本時の目標 筆者が取り上げている「ハンカチ」の事例を読み取ったり、別な事例を考えたりすることで、文章の要旨をとらえることができる。【読む能力】

◆かかわり合いの目標

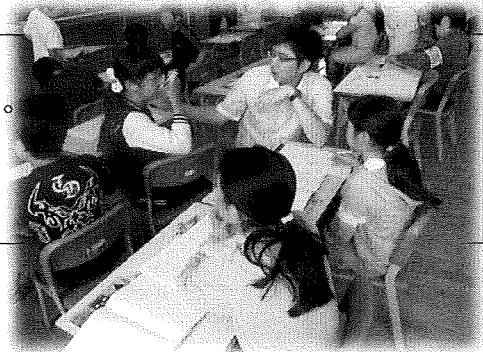
- ・同じ立場同士でかかわり合い、事例の説明を書くことができる。
- ・友達の発表を聞き、筆者の要旨に合う事例を選び、説明できる。

◆本時の展開

	学習活動
導入 10分	①ワークシートの教材文を音読する。 ②学習の目的を伝え、課題を提示する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 筆者の考えを深く理解するために、筆者が伝えたいことに合わせて事例を全員が説明できるようになろう。 </div> ③教師の範読をもとに、本文から筆者の伝えたいことと、それに用いた事例を読み取り、ワークシートに書く。 ④学習の流れを提示し、学習の見通しをもつ。



<p>展開 28分</p>	<p>⑤個人解決 指定された条件に基づき、ワークシートに筆者の伝えたいことを考え、記述する。</p> <p>⑥かかわり合い 記述を終えた児童から、考えた説明について、「筆者の伝えたいことと内容が合っているか」という視点で交流し、アドバイスし、サインをする。2つサインを集めた児童は、困っている子の手助けをしたり、新たな事例を考えたりする。</p> <p>⑦かかわり合い（全体） 考えた新たな事例の発表を聞き、筆者の伝えたいことに合っているかを検討する。また、参考にできる部分を自分の記述に取り入れる。</p> <p>⑧学習のまとめを行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>筆者が取り上げている事例を読み取ったり、別な事例を考えたりすることで、筆者の伝えたいことを深く理解することができる。</p> </div>
<p>まとめ 7分</p>	<p>⑨ワークシートに書かれた問題に取り組む。 また、ペアでその答えを選んだ理由を交流する。</p> <p>⑩課題の達成状況を確認し、振り返りを行う。</p>



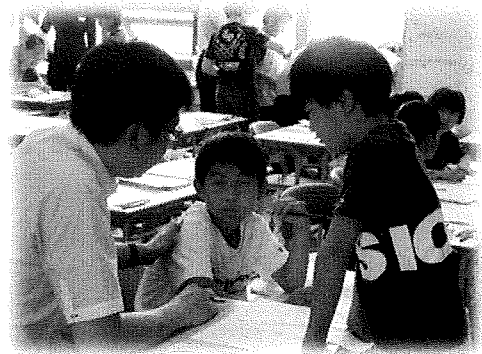
●研究協議

◆課題について

- ・「事例を説明できるようになろう」と、行動表記型になっており、ゴールがわかりやすい課題だった。しかし、さらに具体的な課題にできるように思う。例えば、「筆者が伝えたいことに合わせて、『ハンカチ』の事例を要約し、要旨を説明できるようになろう。」「『同じ事実でも、言葉によって違った『事実』の受け取り方をする』につながるオリジナル事例を書こう。」などが考えられる。

◆かかわり方について

- ・子どもたちはかかわろうと一生懸命頑張っていた。かかわり方について、正しい姿を伝えていく必要性を感じた。
- ・丸写していた児童（フリーライダー）にも、より確かな学びが実現するような手立てが必要である。
 - ①かかわり合って学ぶときのきまりの視覚化
 - ②個人解決の時間の確保
 - ③発言時は輪番発言をさせる（対等性の確保）等に取り組むとよい。
- ・かかわり合って学ぶ目的を伝えていたところがよかったと思う。常日頃から子どもの体にしみこんで子どもたち自身のもとなるように、どの学級でも伝え続けていく必要がある。ぜひ適切なかかわりをフィードバックし、「わからなかった〇〇さんが、（こんなことが）できるようになったね。」などと価値付けることができればよいと思った。



◆個人学習について

- ・国語の授業でも、授業後半における個人学習の場の設定により、課題の達成を確かめられる場合があるとわかった。今回の授業のような習熟問題パターンだけでなく、別な文章の事例をまとめさせたりするパターンもあると思う。
- ・授業後半の個人学習では、3名が誤答していた。その児童に授業の中でフォローができなかったのは、研究の取組として課題がある。次の4年生の研究授業では、授業後半の個人学習で児童の達成状況を明確にし、誤答した児童に確実なフォローをする取組が見たい。
- ・課題の達成を見取る問題が国語では特に難しいと感じた。本時の内容と結びつける問題はあった方がいいのか、正直わからなかった。
- ・個人思考の時間の確保と解決のための手立てが課題であることが明らかになった。
- ・「教科として」と「チーム学習として」の両立が難しいと思った。(個人思考の時間等)



●赤坂教授からの指導助言

- ・チーム学習は、「どのようにして生きていくのか」というキャリア教育である。したがって、学級の実態を見ながら進めていくとよい。
- ・アウトプット型課題は、子どもたちが「今日の授業は、あそこに行けばいいんだ！」というゴール像をもつことができる課題である必要がある。本時の場合であれば、「新しい事例を考えて、仲間に伝えよう」という課題でよかったかもしれない。
- ・ワークシートには、フォローアップの手立てがあるとよい。本時の④(全体課題にかかわるもの)と⑤(個人課題にかかわるもの)を別プリントにした方がよかったかもしれない。資質能力を育むことを考えると、「筆者の考えを使って、新しい事例を考える」展開でもよかったのではないか。また、フォローアップの手立てには、ヒントカードのようなものがあり、教師が直接教えず、かかわり合って学べるように手立てを準備する必要がある。
- ・子ども同士のかかわり合いの中では、どうしても、すぐに答えそのものを教えてしまいがちである。喉の渇いた人に、すぐに水をあげるヘルプから、井戸の掘り方を教えるサポートができるようになるるとよい。
- ・学習のスタートは、「何だろう？わからないな！」といった具合に個人で始まり、ゴールも個人でできるようにする必要がある。
- ・かかわり合いでは、「やらせっぱなし」はいけない。適切な学びやかかわり合いとフィードバックすることが大切である。この時間をどのように位置付けるか、「わからなかった〇〇さんが(こんなことが)できるようになったね。」「友だちのワークシートをうつしてしまったけれど、頑張っていてよかったよ。」などと価値付けてあげることが大切である。
- ・評価については、誰ができていて、誰ができていなかったのかを、しっかりと見取る必要があり、そのためには、見える化できるようにするとよい。



●教育講演会

講演題 「学級経営の充実と協同力を高めるチーム学習」 講演の概要

アクティブラーニングが目指しているのは学力の向上ではなく、資質能力を身に付けることです。では、資質能力とは何かと言うと、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力、生きて働く知識・技能、そして、学びを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力・人間性の三つになります。

質の高い知識・技能を身に付けるためには、アウトプットの保障が重要になります。例えば、先生方に「教材研究してきてね!」と言っても、しないかもしれませんが、「教材研究してきたことを発表してもらおうからね!」とすると、一生懸命教材研究をする、つまり、知識・技能の注入につながります。このように、アウトプットを保障することで、人は、知識・技能と思考力・判断力・表現力の間を往還することになります。その際、往還しながら答えを求めていくための橋渡しをするのが協同的、問題解決力です。多くの問題は、一人の人間の力では解決できないことが多く、解決に向かうためには、協同的、問題解決力が重要になります。

このように見ていくと、積極的に子どもたちが学んでいない学習は、アクティブラーニングではないということになります。学習は、質と量、意欲のかけ算構造で成り立っています。これまで、多くの学校では、学習指導の改善や学習時間の確保に熱心に取り組んできましたが、学力が向上しない状況が見られました。どうして、このようなことが起きるのかというと、意欲の部分が、学力の向上に大きく左右するからです。意欲が高まっていない学級では学力は伸びません。

では、意欲を伸ばすにはどうしたらよいかということになりますが、教室の環境、雰囲気の影響がとても大きいです。そして、環境や雰囲気には、人間同士の関係性が大きく影響します。人間同士の関係性が成立していないところでは、どんなに優れた指導を進めても、効果は上がりません。実は、仕事の成功は、関係性の成功にあると言われており、関係性の質が上がると思考の質や行動の質が上がり、そのことが結果の質を上げることになり、しいては、関係の質が高まるという好循環を生むことになります。

協同は、いわゆる一般的に学力と言われている認知能力と社会性や人間性、倫理性といった非認知能力の両方を高めることができ、さきほどの関係性を高めることもできることから、子どもの教育に有効です。

ここで、協同と協同学習について確認すると、協同とは「グループメンバー全員に到達できるような目標が設定されている事態」であり、協同学習は「学級のメンバー全員のさらなる成功を追求することが大事なことで、全員が心から思って学習すること」です。協同学習では、仲間と助け合うことができ、また、仲間とつながって幸せになることができます。お互いに話を聞き合うことは、人間関係づくりにつながり、人を助ける経験は、自尊感情を高めることにつながります。

子どもたちには、みんなで学んだ方が賢くなること、すなわち、協同の価値を伝えましょう。問題解決の方略をしっかりと与えるとともに、子どもたちにやらせっぱなしにはさせずに、適切な学び方・かわり方をしっかりと価値付けることが大切です。

また、協同学習を支える土台である学級の雰囲気も大切です。子どもはルールではなく、雰囲気に従います。「みんなが参加できるように声をかけよう」「考えを批判しても、考えを述べている人を批判しないようにしよう」「学級では、みんなが一緒ということ



いつも心に留めておこう」こうした集団のルールを明示することでお互いに助け合える雰囲気ができます。

そして、かつての「活動あって学びなし」という批判に陥らないために、誰ができていて、誰ができていないのかをしっかりと評価し、できていない子にはフォローアップする時間を確保することと、「わからなかった〇〇さんが（こんなことが）できるようになったね。」と価値付けることが大切です。子どもたち一人一人をしっかりと見取る・ねらいに対しての達成度を見取る、教師の評価眼が試されます。これからの時代の教師は、授業を俯瞰して見る力を付けていかなければなりません。

名寄小学校で取り組んでいる「チーム学習」は、協同学習の一形態になります。

学習過程としては、

① 課題提示【学び方のルールの理解】

- ・全員達成を求めること- 授業は、常に全員達成を目指すところであり、その願いを教師と子どもたちで共有する。
- ・行動表記型の学習課題を掲げること- 子どもたちと学習課題の達成について確認するので、子どもたちから見てわかる行動を表記する形にする。



② 個人思考【個人の学びの自覚】

- ・個人の学びであることを自覚させるとともに、わかるか、わからないかを明確にさせ、解決への意欲を高めること。（意欲をもたせるためには、授業の最初の10分で問題解決方略を与えることが大切である。問題解決方略の具体としては、仲間や参考書、ヒントカードなどが考えられる）

③ 交流による解決【協議のルール】

- ・交流における課題と結末を明確にすること- 交流内容や交流方法、交流した後、どうするのかといったことについて、子どもたちにしっかりと伝えておくこと
- ・かかわり方のしつけが大切であること- 交流が機能するためには、協議のルールが必要であり、「同じくらいの時間で順番に話すこと」や「人の話を最後まで聞く」「聞いていることを態度で示すようにする」「どんな意見も肯定的に聞く」といったことを徹底すること。
- ・再生過程の共有から創造過程の共有へ- お互いが行ったことを共有化する活動から共に課題を解決する活動へと進めこと。

④ 学習成果の確認【見える化】

- ・全員での達成を確認した後、個人での達成を進めること- 見取りが大事であり、何人ができて何人ができないのか、どの程度できて、どこの部分ができないのか、しっかりと評価すること。

⑤ 振り返りとフィードバック

- ・授業は、教師と子どもの共通の課題であり、一緒に振り返ること- 子ども同士の振り返りにより、授業は改善すること。
- ・フィードバックについては、教師自身がメタ認知し、プラスのことを子どもたちに伝えること。

協同学習（チーム学習）の趣旨を理解し、それぞれの学習過程にしっかりと取り組んでいただきたいと思います。